

# ほなひ歴史通信

第66号  
2013.3.1

大子町・鎮守の森(一)

近津神社(大子町下野宮一六二六)

高根信和

旧大子町立下野宮小学校の裏手は、江戸時代に水戸城下から棚倉方面に至る南郷街道が走り、奥州と常陸国境近く、旅人や商人の往来も多く交通の要所として栄えたところである。近津神社の随神門をくぐると左手の神池の中に小さな祠がある。境内はひっそりと静まりかえり、杉木立が参拝客を迎えてくれる。石段をのぼると入母屋造の拜殿、その奥に神明造の本殿がある。社伝によると、祭神は風神の祖神である級長津彦命(しなつこのみこと)である。当社は古来陸奥国に属し、上の宮といわれる馬場都古和気(ばばつこわけ)神社(福島県棚倉町)、中の宮といわれる八槻都々古別(やつきつこわけ)神社(同町)、下の宮といわれる近津神社(大子町)が近津三社と総称されていた。江戸時代には本社が常陸国水戸藩領になり、現在に続いている。

拜殿右下には推定約六〇〇年、樹高約五〇メートル、周囲約八メートルの「都々母杉」が立っている。昔、源義家が戦勝祈願を込め手植した杉と伝えられている。また、拜殿左側には、鉾杉(県指定天然記念物)がある。樹高約四〇メートル、幹周囲約

九メートルの巨杉で、源義家が鉾を掛けたことにその名が由来しているという。その後代々その地を支配した北条氏、結城氏、佐竹氏などの篤い保護を受けてきた社である。

毎年六月の夏至の日に行われる神事の御田植祭には、福島、栃木方面からの参拝者でにぎわう。昭和三十九年ごろまで行われた神事、御枘小屋の神事(御枘廻祭)は、元は祈年・新嘗祭のまつりで、旧正月二十七・八日、旧十月二十七・八日、保内郷内に神輿が渡御する。その際、氏子に良い種籾を分け与え、稲の豊穣を祈り、秋に籾を奉納して神に感謝の意を表わすものである。

自然豊かな境内は、人の心をやさしく迎えてくれる杜である。

(元茨城県立歴史館学芸部長)



近津神社と鉾杉

メモ ・ JR水郡線下野宮駅下車徒歩約五分

・ 車で国道一一八号線新万年橋を渡り信号右折

## 光明真言塔余談(一)

野内泰子

光明真言塔というのは、光明真言(真言密教の唱える呪文の一つで、大日如来の真言であるといわれている)を梵字で円形に配列した石塔のことである。この梵字の下に一百万遍供養塔という文字が刻んであったり、また、文字のみで、奉唱光明真言百万遍供養と刻んであったりする。多分、よく耳にされていると思うが、唵(オン)・阿謨伽(アボキヤ)・尾盧遮那(ペイロシヤナウ)と唱えるもので、日本では唐の国から帰国した空海(弘法大師)が高野山に居を定め真言宗金剛峯寺を開創した九世紀初め頃からこの教えが伝えられるようになった。

石にいろいろな願いを刻んだ塔、いわゆる石塔は種類も様々で、大子町内では馬頭観音様と呼ばれる馬頭観世音塔が最も多い。これは、昔、大子地方が馬産地であったことを物語るものであろう。

また、石塔の中で念仏塔と呼ばれる物は町内に七〇基ほどあるが、この中には十九夜念仏供養塔とか四十八夜供養塔などがあり、光明真言塔とはつきりしているものは一基しかない。町内の石仏石塔全体では、調査がなされているものだけで約一六〇〇位あるが、その中では数が少なくそれだけに貴重なものである。

前置きが長くなったが、ここで取り上げたいのは、下津原地区にある光明真言塔についてである。先に述べたように、光明真言塔は大子町全体で一基しか見つかっていない。その中の二基が下津原地区にある。

この二基とも形状、大きさ共ほとんど同じで、一方は墓地の中にあるので、その先祖が祀ったものであることは明らかだ

が、もう一方は下津原地区にある薬師堂の境内で見つかったものの、誰がいつ頃祀ったものかわからなかった。ところが、ひよんなことからそれがわかったのである。

ご存知と思うが、下津原の薬師堂は、下津原地区のほぼ真ん中あたり、山寄りの杉林の中にある。方形の赤い屋根の上に宝珠をのせた大きくはないが立派なお堂である。ここには、もと、三友院という真言宗の寺があり上利員鏡徳寺の末寺であった。旧は、松宮山医王寺宝光院といったと新編常陸国誌にもある。現在この辺り一帯は共有地となっていて、この中に建っている薬師堂も共有地組合で仕守りをしているが、かなり広い土地であり、ここにあった寺も大きなものであったろうと想像される。薬師堂はこの境内の中に建っていたものと思われるが、寺はなくなっても薬師堂だけは残された。それは、秘仏とされる薬師如来像は霊験あらたかで、眼を病む患者のお参りが絶えなかったという言い伝えからも納得できる気がする。往時の名残りは、この薬師堂と周辺に残る住職のものとと思われる数基の墓石のみだが、薬師堂のお祭りは毎年、四月七・八日に龍泰院の住職をお迎えしてしっかりと行なっている。

話がまた脇道にそれてしまったが、実は、この光明真言塔は、境内の端の寒竹藪の中にあつたもので、調査の途中、偶然この石塔を見つけたのは、二〇数年前のことであった。だが、下部が割れているようで大きさの計測は不能であった。ところが、この石塔がなくなつてしまつたのである。(次号に続く)

(大子郷土史の会)



なくなった塔



下津原薬師堂

## 百年前の大子を行く(一)

大金 祐 介

今から百年前の明治大正期、保内郷を代表する商業地であった旧大子町には様々な商店が軒を連ねていた。本稿の趣旨は、そうした商店を紹介することにある。読者の皆様には、各商店の紹介を通して、商業という視点から百年前の大子に接していただければ幸いである。なお、史資料の限界により当時の商店を必ずしも網羅的に紹介できないことがある。あらかじめご了承ください。

さて、今回取り上げるのは呉服店である。呉服店は、呉服太物商とも呼ばれ、呉服(絹織物)と太物(綿織物・麻織物)をはじめとした衣料品全般を扱っていた。左に紹介している通り、百年前の大子の呉服店はいずれも当時の人々の好評を博していた。

**近江屋号外池商店**(店主・外池太一郎)は、金町(現・器而庵)に店を構えていた。同店は、呉服太物、醤油醸造、肥料の三部を展開し、度量衡器販売人や塩の元売捌人も兼ねる大店であった。県下に名を馳せていた「金鶏」醤油や「丸越」肥料は、いずれも外池商店の醤油醸造部と肥料部から売り出されていた。「いはらき」新聞(明治四十三年三月二日付)に掲載された大子町紹介記事「大子号」は、外池商店呉服太物部を「斬新なる珍柄を取り揃えて価格も廉なりとの評判」と伝えている。

**樋口呉服店**(店主・樋口佐平)は、泉町(現・旧筑波銀行大子駅前通支店)に店を構えていた。同店は、同じく泉町にあった樋口本店(金物、肥料、運送、荒物の四部を展開する大店)の呉服部が独立して開業した店であった。『イハラキ時事』(第六巻第九号、大正



樋口呉服店(大正10年旧正月初売り)

十年九月十五日発行)は、樋口呉服店の特色は「目を惹ける又時代に適當せる品柄を選べることにある」と伝えている。

**三河屋商店**(店主・雫虎吉)は、泉町(現・旧マルス鮮魚店)に店を構えていた。同店は、当時はまだ珍しかった蓄音機を宣伝に活用するなど、ハイカラな店であった。前述の「大子号」は、同店を「蓄音機を備付けて山間の御得意さまにヤンヤと受けて居る」と伝えている。

**島崎呉服店大子支店**(店主・島崎善平)は、金町(現・NTT)に店を構えていた。同店は、那須郡烏山町(現・那須烏山市)に本店を置く島崎呉服店の支店で、本店から派遣された番頭が差配していた。大正八年一月に重厚な石造りの店舗と袖蔵が落成、続く新築記念大売出しでは、直径四間(約七メートル)高さ八間(約一四メートル)電灯五〇〇燭の大提灯を披露して保内郷の人々を驚かせた。

**内田呉服店**(店主・内田九兵衛)は、前述の島崎呉服店で修行した内田九兵衛が本町に開業した店である。同店は、各種織物の卸小売店で、どちらかというと織物店に近い品揃えであった。

(筑波大学人文学類)

## 新聞記事にみる満州移民の断片(一一) 第九次冷家店大子町開拓団の軌跡

昭和十六年七月三日付「いはらき」新聞夕刊からの引用の続きである。大子町開拓団の「冷家店開拓団綱領」、「団訓」は本誌第六一号ですでに紹介した。残るもう一つの「共同宿舍自衛訓」は次の通りである。

- 一、共同宿舍生活は苦楽を共にし死生を同うせんとする同志の家庭にして又修養の道場たり故に団員は起居の間過去を棄て赤裸々となり黙々として開拓精神を涵養し自肅自戒規律正しく鞏固なる団結を完成する
- 二、夜は早寝早起きの慣習を作る
- 三、職務の存する所責任自ら之に伴ふことを自覚する
- 四、飽食飲酒に注意し健康、体力、氣力の増進を計る
- 五、強弱相扶け共に働く

ここには、共同宿舍を利用する者が自ら努めて堅守すべき事柄が列記されている。昭和十四年十二月策定の「満洲開拓政策基本要綱附属書」は、「三 開拓地行政経済機構に関する件」のなかで「開拓団は開拓地建設を指標とし団長の中核的指導の下に開拓団全員の鞏固なる精神的団結を以て建設事業を遂行し開拓地経営の基礎を確立す(満洲開拓史)と謳い、「精神的団結」の重要さを強調しているが、まさにこの「精神的団結」と勤労の精神を鼓舞する内容になっている。

以上の三種類の文書がいつ頃、誰の手によって起草され、またどのような経緯で策定されたのかは詳らかでないが、いずれにしても、大子町開拓団の考え方や規律は、国策として進められていた「満洲開拓政策」の枠組みに規定されていたことは確認できるであろう。

さて、当該記事にはもう一つ重要な情報が盛り込まれている。「本団幹部全団員氏名出身地」である。以下に列挙してみよう(氏名の漢字表記の正誤については確認できないが、斎藤良治氏の『開拓の記録』に登場ししかも表記が異なる人名についてのみ参考として括弧内に付した)。

- 団長菊池正修(大子町)、農事指導員齋藤良治(斎藤 大子町)、足立清(安達、大分県)、畜産指導員宗広 三(岐阜県)、保健指導員羽鳥正邦(結城郡)、会計主任富永昌(大子町)、弁事所長後藤一郎(金郷村)、第一班長長山佐武郎(大子町)、第二班長吉沢次男(大子町)、第三班長吉沢勘介(大子町)  
一般団員菊池寅吉、菊池辰雄、川合清一、長山郡、神永輝、菊地勝雄(菊池)、白砂午三九、河野勉、増子重吉、吉沢春吉、中野鉄彌、中野武、島村自兵衛(治兵衛)、仲沢光義、長山茂、増子兼吉、菊池貞、菊池勇、菊池昇、岡良一、齋藤四郎、吉沢文彌、中沢泰一、菊池利夫、中野清、吉沢一男(以上大子町出身)、石井清(袋田村)、肥高保一(宮川村)、桜井佳吉(福島県相馬郡小高町)、益子一力、益子精一(上小川村)、田沢初信(依上村)、林武夫(東京向島吾嬬町)、富永正(久米村)、益子美芳、益子實(栃木県大山田村)、吉田隆(君原村)、石井正、石井仁(袋田村)、塩沢市寿、青砥博寿(博二、上小川村)、藤本忠(正、中里村)

役職員は菊池団長ほか九名、一般団員は大子町出身者一六名、それ以外の出身者一六名、合計すると五二名が確認できる。本誌第五九号で紹介したように、同記事は「現在団員五十名家族六名、幹部職員その他廿名合計百六十六名の集団である」とも伝えている。「全団員」五二名との間には一〇〇名余の差があるが、これはどう解釈したらよいのであろうか。

(齋藤)

天狗党西上(二) 大子を出立、下野・那須野ヶ原へ

本誌第六三号では、「天狗党西上 大子で戦う」と題して元治元年九月から十月にかけての天狗党の戦いぶりを跡付けた。本稿は、その続きである。上京のための陣容を整え、大子宿を出立してからの足取りが判明する。

二十九日 部隊を分け定む。この日朝より民兵共山上より鉄砲打ち掛けし故に追い払いて後に上京の支度、兵隊を分ける

天勇隊 軍将 須藤敬之進、隊長は(記載ナシ)

奇兵隊 軍将 武田魁輔 隊長には檜山三之助

渡辺矩之助 川崎健之助

龍勇退 軍将 畑筑山 隊長 嶋田文右衛門

小林忠雄

虎勇隊 軍将 三ッ橋平六 隊長 市毛孝之助

滝口六三良 兜惣助

正武隊 軍将 井田因幡 隊長 前木元之助

庄司与十良 米川隼人

義勇隊 軍将 朝倉弾正

国分新太郎 平野重三良  
軍正 鈴木秀太良 唐津俊蔵

旗奉行 松崎熊之祐

その外輜重府、武器方、觀察府、軍正府、使番等を定め都合其勢凡千人余、大銃は一隊につき一挺或いは龍勇隊に二挺にて軍議を決定し出立ける。

十一月朔日 大子宿出立。讃岐(佐貫)村に休み、ここより少し行き峠登りし處、常州野州之国境也。左は黒羽烏山道、右に入りて二十町ほど行き寺の馬場に出る。

下野国那須郡 雲願(巖)寺也

前に下馬札有り朱塗り欄干之橋有り、行きて道に迷いて夜に入り一日夜 川上村に泊まここの里人一人も居らず逃げ去りける故に不勝手に大いに難儀し漸々此処彼処を尋ねて鍋釜を得て食事を調べけり。翌日此処を立ちて黒羽峠を越しけるに道細く左右山高くして一行殊の外歩行なりがたき処を押し行くに山の頂に黒羽の人数待設けており、近寄るやいなや小砲打ち掛けたり、味方之を見て道狭く木を切り倒して進み難くやや暫く砲戦仕り候内味方三人打たれ、敵は大将を肩先より打ち抜かれあつと云うて倒れけるに敵方之を見て防戦の色無し、味方はこぞ大事と連発しければ逃げ去りけり。

この時すわや追討して峠を越せと下知為す故無難に此処を打ち越しけり。二日夜 川原村泊まり、此処黒羽の領内にて里人逃げ去りける。漸く村役人を見つけて早速黒羽城中へ領内の地借用の旨詳に認め応接差し出しけり。城下迄三里翌日立ちて伊王野宿に出る。ここは奥州棚倉道中、町過半焼失の体、民兵五百人余固めてありしが、応接して通行しぬ。

この宿出離れし処向こうに幕打ち回し相堅めの体見へれば応接差し出し候処、皆甲冑に身を纏て有りけるか委細述べければ早速承引しける故、味方繰り出して城下に着く。之は那須七騎の内にて芦野采女之丞様なり。芦野宿へ出て奥州道中を行きてその夜は掘越宿・鍋掛宿に泊まり。

ここに止宿中大田原城中より応接来たりし故に、城下につかずして二里間道を行く。

四日夜 高久村に泊まり、此処は黒羽領民兵竹槍数多く捲え置く体なり共、繰り込みければ大いに歓待しける、翌日此処を立ちて一里余行きて那須野原に出る。

(石井)

【資料紹介】明治二十四年七月「袋田土産」について

磯浜町（大洗町）の浅井光政は「袋田の滝は世に珍らしき処なりと聞けは、いかとて思ひ」、明治二十四年（一八九一）七月二十八日に出発する。佐藤次男氏から「教示をつけた「袋田土産」を紹介しよう。

二十八日夜は太田に宿泊。二十九日、「太田町を経て馬場、増井、松平、国安、町田、中染などの駅路を過ぎて午前十一時に天下野駅某方へつき」、昼食をとる。「茲より袋田の滝までは五里余りにして、しかもけはしき山路」、「折しも東金砂山の頂きよりの夕立の雲おこり鳴神の音さへひきわたり雨いみしう降そぐ」、鳴神の過行をまち、雨具をとのへ、しひて、出たつ、吾里はかり過ぎて下高倉村に至りぬ、程なく上高倉村にさしかゝる道ぬかりて、ひと足毎に下駄は皆ひちの中に入りて、いとくるし、夫より小生瀬村を過ぎ吾里斗山根伝ひをたとり来て午後六時頃、名も高き月折と男体との山間なる新道にかゝれり、茲はけわしき坂道なりしを、さきつとし、巖を穿ち百四十八間の洞道をしつらへたる処なり、黄昏の頃なれば、そこらをくらくて彼音に聞、大江山の岩屋もかくやとおもはるゝ斗恐ろしく、もし崩れもやせんとよしなき事をおもひ煩ひて、しはし、ためらひしか、めしきふるまひなりと笑はれん事の口をしさに、しひて、間路をたとりゆくに、なかは過る頃、岩間をもるゝ清水の俄に、かうへのあたりへ、さとははしりたる、つめたさに、魂も消なんと心地すれば、戯に、

結はんとおもひし物を石清水、あやふく袖をぬらしつるかなと、ひとりこちつゝ漸午後七時頃袋田村藤田伊重方へ宿りぬ、此宿を浴詠楼といふは温泉のあれはなり、温度はいとひきゝ方なれと清らにして、しかも諸病に、しるし有りとなん、されはにや四季ともに湯あみの人絶えずつとへり、夜八時過ぎ、又もや雨降出て鳴神の音さへいとすさましく、今にも落なんとする

けはいにとゞるきて歌もえよます、ふしとに入りぬ」

三十日朝「滝をみんとて草履をかり細き山路の露、踏分けて五六町はかりたとりゆけは、ちいさなる籠り堂ありて此頃来りしといふ修験者に逢へり、あないを乞ひしに心能うけかひ常ならは流れにそひ岩かね伝ひに行かるへきを生憎水かさまして危ふければ、くるしくとも、うしろの坂道を攀登らんとて葛かつらを、ちからに、木の下闇をくゞり苔むす細道おたとりつゝ、曲り曲りて三町はかり登り辛らして不動堂へ到りひまより滝壺のほとりをみわたすに、水煙深くして、岩にくたくる浪の音のとゞるに響けは、耳しひにならんをおそれてほとりはむ事も、えせさりき、此山は岩のみにて岩と岩との狭間より枝さし掩ふ楓樹、いと多ければ、錦染なす頃は、いかはかりならんなど、おもひやらるゝ

岩間より涼しき風も、ふくろ田の滝のほとりは夏としもなしくり返しみれともあかす聞しよりまさりて長き滝のしら糸とつたひ、「もと来し道へ帰りぬ、夫よりきのふ下り来し新道のなかはを左りの方へ入り、ふる道へさしかゝるに朝霧猶ふかく立こめ、まのあたりさへ、おほるけにて、物のあやめもみえず」、「やうやうそねに登る、此峰の北の方に烈公の君か物せられたりといふ石文あり、その裏をみるに

尋ぬれば人は昔の名のみにて、雲井の月ぞ澄みわたりけるとあれは、

澄わたる雲井の月の影よりも、仰けそ高し、君か言の葉

茲より西の方麓をみおるすに桜幾本となく生茂りたり春の頃はよきなかめならんかし

縁しあらは 弥生の頃に 又も来ん 月折山の花を尋ねて

午後五時頃太田町西町の銚子屋に着いた。三十一日、石神を過ぎ村松村へ。夕六時すぎる頃、我家へ帰り着いた。妻が、まぢわびて、土産は何ですかという。袋田の土産は、「今も猶耳に残れる袋田の滝のひきそ」と答えて興じたという。（野内）

## 神社祭礼におけるお囃子の伝播過程について（一）

大子町を事例にして

家田 望

私は地元の太鼓や笛を演奏する民俗芸能の魅力を習うようになった。伝統芸能であるお囃子の魅力を知り、興味を持つようになった。また、各地の祭りを見に行く機会が増えるようになって、例えば、水戸の祭囃子と大子町の祭囃子の演奏スタイルや雰囲気の違いが同じ県なのに違うことや、栃木県的那須烏山市の祭囃子の演奏スタイルや雰囲気が違う県なのに似ていることに気がついた。また、大子町大沢地区のお囃子の曲と上岡地区のお囃子の曲が、離れた地域なのに同じであることにも気がついた。こうして、地元と各地のお囃子の違いなどに興味を持つようになり、お囃子の音楽性だけではなく、お囃子の歴史や地域社会とのつながり、お囃子がどのようにして発生し、どのようにして発展したのかなど、お囃子にまつわる諸問題を明らかにしたいと考えるようになった。

そこで本稿では、大子町を事例にして、茨城県の中山間地域におけるお囃子の伝播過程と、お囃子がどのようにして現在まで継承されてきたのかを、地域社会や地域文化などの視点から明らかにしたいと思う。

一般にお囃子とは、神社祭礼で太鼓や笛を演奏する民俗芸能のことを指す。このお囃子は大きく分けて二つある。第一は神楽のお囃子で、神を呼び降ろし、その前で鎮魂の祈祷として舞を踊る際に演奏するものである。第二は、祭囃子といって、はやし立てる「のはやしで」、調子にのせる「上手く誘って気分を起こさせる」ことであり、祭りをにぎやかにし、人々をうきうきした祭り気分させる役割がある。山車・屋台・ダンジリ・

曳山などの上で演奏する音楽である。本稿では、後者の祭囃子を中心に検討することとしたい。

そもそもお囃子は、京都で発生したものがそのまま各地に伝わっていったのではなく、祇園囃子と江戸囃子に違いがあるように、伝わる過程で変化していったり、伝わってからの地域の人々に合った曲調に変化したりする口承文化であるといつてよい。お囃子とは何か、どこで発生し、どこから広がっていったのかを調べてみると、お囃子は京都の八坂神社の祭礼で行われた山鉦巡業とそれに伴うお囃子が典型的な祭のスタイルとして全国に広まっていったことが始まりであるということが明らかになった。また、その囃子が江戸に伝わり、江戸の人々によってアレンジされ、変化する中で江戸囃子が誕生し、茨城県の囃子についてもそれが元になっていることもわかった。

茨城県の中山間地域に伝播するお囃子は、栃木県那須烏山市の山あげ祭や那珂川の船運によつて運ばれてきたとも言われる例のように、那珂川の船運によつて運ばれてきたとも言われる江戸囃子の系統である「烏山系」と、城下町水戸や江戸時代に海運の要衝として繁栄した那珂湊などで働いていた芸者達によつて流布された江戸囃子である「芸者囃子系」との二つの囃子の系統に大きく分けることができる。大子町の場合も、烏山系に属するが、上岡地区を含め各地域では「通り囃子」という曲も行われていることから消滅しつつある地囃子の中に一部芸者囃子系の流れが入っていると思われる。

大子町は栃木県に隣接し、栃木県との文化的交流があることから、茨城県の中でも大子町の文化圏は栃木県と同じであると推測されるので、栃木県の祭囃子について調査した。栃木県内で屋台や山車等で演奏される祭り囃子の種類は、大きく分けて「江戸囃子」「大杉囃子」「日光囃子」の三系統である。この中

の江戸囃子系は、お囃子の太鼓の厚さは芸者太鼓に比べて厚く、大太鼓と小太鼓二つがそれぞれ異なるリズムを叩き、一つの曲にするという囃子のスタイルである。調査を進めていく中で、大子町で行われているお囃子のスタイルも同じであり、同じ曲目や栃木県の囃子の流派が大子町に分布し、囃子自体が影響を受けていることがわかってきた。このことから、栃木県の祭囃子が大子町や常陸大宮市鷺子に影響を与えていることが明確になった。(次号に続く)

(茨城大学教育学部)

名称	伝承地	伝承組織
十二所神社春季例大祭(ぶんぬき祭り)	大子7町	
浅川のささら	浅川 3903(熊野神社)	浅川ささら保存会
上岡の人の形芝居	上岡(八龍神社)	廃絶
十二所神社・八龍神社大祭礼	上岡(十二所神社・八龍神社)	
下金沢のささら	下金沢 1068(十二所神社)	廃絶
花室神社春季例大祭	左貫 地囃子「スミダレ」	
近津神社(中の宮)祭礼	町付	
八溝嶺神社のぼんでん	上野宮字八溝 2119	八溝保勝会
北吉沢のささら	北吉沢(熊野神社)	廃絶
中田植	下野宮 1626(近津神社)	近津神社氏子
近津神社出社大祭七日祭	下野宮 1626(近津神社)	
矢田の神楽	矢田	休止
袋田の神楽	袋田	廃絶
諏訪神社祭礼	袋田	休止
根渡神社祭礼	大沢 406(根渡神社)	

大子町における囃子(参考文献:『茨城県の民俗芸能 茨城県民俗芸能緊急調査報告書』平成8年茨城県教育委員会)

## 編集後記

昭和の時代、大子町にはどの市町村よりも多くの郷土史家がいる、郷土史研究団体を結成し、歴史にとどまらず民話や民謡、民俗芸能、風俗習慣、方言や祭り事などに至るまで郷土の文化全般にわたって研究し、機関誌を発行して成果を発表していました。また、大子町は、日本を代表する歴史学者であった肥後和男先生(東京教育大学名誉教授)を輩出した地でもあります。

平成一桁代からでしょうか、こうした郷土史家の方々が次第に減り、また、町史編纂事業も終了し、郷土史研究が低調になってきたように感じられ、少し寂しく思っていました。

しかし、最近、藤井達也さん、大金祐介さん、家田望さんのように現役の大学生から「寄稿いただき、深い感謝と大きな感動に包まれています。『ほない歴史通信』において、郷土史に興味を持つ若手の研究者が集まり、研究発表、研究交流の場にしていただければと期待しています。

(皆川)

編集	大子遊史の会
編集人	齋藤 典生(茨城大学人文学部教授)
	野内 正美(茨城県立歴史館資料調査員)
	石井喜志夫(元大子町史編纂委員会委員)
	皆川 敦史(大子町教育委員会)
発行	大子町教育委員会
	久慈郡大子町大字池田二六六九番地
	大子町立中央公民館
	☎0295(72)1148